

スーダン遺跡紹介 第4回

メロエ西墓地 (West Cemetery) その2

坂本麻紀紀 (アラブ調査室研究員)

はじめに

スーダン遺跡紹介の4回目は、前回、途中となったメロエ西墓地 (West Cemetery) の続きである。

クシュ王国が古代エジプトを支配した時期をエジプトの歴史では第25王朝（クシュ朝；722-655 BCE）と呼んでいるが、その第25王朝の基礎を築いたのが、クシュ王ピアンキ (Piayankhy, 753-722 BCE) である。このメロエ西墓地はピアンキ王の時期（紀元前8世紀中頃）からメロエ末期（紀元後3世紀末）まで、1千年以上に亘って高官や王の家族などの墓が築かれた墓地遺跡である。360m×280m ほどの範囲の平地に、南東から北西にかけて 800 以上の墓が広がっているが、西墓地の墓の年代については、発掘報告書「The Royal Cemeteries of Kush」(R.C.K.) Vol.5: The West and South Cemeteries at Meroe (1963) で設定された年代幅が大きすぎるため、同じ時期に墓の造営が始まったとされる南墓地 (South Cemetery) のように墓の年代を細かく区切ることが難しい状況となっている。そのため、前回、西墓地の分析対象の墓 820 基を「ナパタ期」、「ナパタ期—メロエ期」、「メロエ期」、「年代不明」の4つの時期に分け、墓地の西側にはナパタ期の土坑墓 (Pit grave) を中心とした墓群、その東隣にはナパタ期と、ナパタ期からメロエ期へ移行する時期のマスタバ (Mastaba) やピラミッドなど上部構造を持つ大型の墓、中央にはメロエ期の上部構造を持たない岩窟墓 (Rock-cut tomb) の墓群、そして東側にはメロエ期のピラミッドなど上部構造を持つ大型の墓や上部構造を持たない岩窟墓が密集している、というように大まかな分布と墓の型式を示した。しかし 820 基の墓のうち 35% にあたる 290 基が発掘報告書で「年代不明」となっていることから、時期ごとの傾向を示すことが難しい状況である。

今回はこの「年代不明」の墓をそれぞれの立地と墓の型式を基に「ナパタ期」、「ナパタ期—メロエ期」、「メロエ期」の3つの時期へ暫定的に振り分け、西墓地がどのような特徴を持つ遺跡なのか改めて考えてみたい。



図1 西墓地のピラミッド

ピラミッドの壁面に人や神が彫り込まれている
(ピラミッド附属の礼拝施設は破壊されている)



1. 年代不明の墓の見直し

墓地遺跡では地表で確認できるピラミッドやマスタバなど上部の構造物に目が行きやすいが、通常、遺体は地下に埋葬される。そのため、上部構造が確認できない墓でも埋葬室などの下部構造があり、墓の型式や遺体、副葬品などから時期や地域、集団による違いなどを見ることができる。

発掘報告書によれば、西墓地の 820 基の墓のうち上部構造を持つ墓は全体の 2 割にあたる 157 基であるが、状態は非常に悪く、建物の基礎部分やその痕跡が確認できる場合がほとんどとなっている。290 基の「年代不明」の墓についても、上部構造を持つ墓は 14 基しかなく、276 基が上部構造を持たない墓となっている。しかし他の墓と同じく「年代不明」となっている墓も、ほとんどの場合、下部構造の確認ができる状況である。墓の型式に加え、立地を考慮しながら、「年代不明」の 290 基の墓を「ナパタ期」、「ナパタ期—メロエ期」、「メロエ期」の 3 つの時期に振り分けた表が以下である（表 1）。

墓の年代		ナパタ期： 紀元前753-330年頃							ナパタ期—メロエ期： 紀元前6世紀前半-2世紀前半							メロエ期： 紀元前3世紀中頃-紀元後3世紀末						
		合計	計	上部構造なし	マスタバ	ピラミッド	ピラミッド	痕跡あり	計	上部構造なし	マスタバ	ピラミッド	ピラミッド	痕跡あり	計	上部構造なし	マスタバ	ピラミッド	ピラミッド	痕跡あり		
上部構造																						
下部構造																						
I Pit grave		4	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	3	0	0	0	0	0
II Pit and side chamber		3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	3	0	0	0	0	0
III A Narrow pit		24	24	24	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
III B Wide pit		19	19	19	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
III C 矩形の土坑+四隅に穴		3	3	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
III D 矩形の土坑+両側トレンチ		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
イレギュラーな土坑墓		33	30	29	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	3	3	0	0	0	0	0
小計		86	77	76	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	9	9	0	0	0	0	0
V Rock cut		36	1	0	0	0	0	1	3	3	0	0	0	0	0	32	27	4	0	0	0	1
VI Pillared chamber		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
VII Niched chamber		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
VIII Drop type		61	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	61	56	1	1	1	2	
IX Slope and N-S undercut, Child's grave		87	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	87	87	0	0	0	0	0
小計		184	1	0	0	0	0	1	3	3	0	0	0	0	0	180	170	5	1	1	3	
下部構造不明		20	1	1	0	0	0	0	2	1	0	0	0	0	1	17	16	0	0	0	0	1
総計		290	79	77	0	0	0	2	5	4	0	0	0	0	1	206	195	5	1	1	4	

表 1 「年代不明」 290 基の墓の型式（詳細）と 3 つの年代

表 1 の横軸はマスタバやピラミッドなどの上部構造を年代ごとに示しており、縦軸は埋葬室などがある下部構造を示している。横軸の上部構造は「上部構造なし」、「マスタバ」、「マスタバもしくはピラミッド」、「ピラミッド」、「痕跡あり」の 5 つ、縦軸の下部構造は

「土坑墓」と「岩窟墓」そして破壊などの影響で構造が分からぬ「下部構造不明」の3つとなっている。さらに「土坑墓」と「岩窟墓」は、それぞれ埋葬室の型式が細分化され、土坑墓では7つ、岩窟墓では5つとなっている（図2の模式図を参照）。また、「年代不明」の墓の年代を決めるにあたって、前回3つの時期に振り分けを行った530基の墓の情報を参照した。以下はその主なものである。

- ① 土坑墓はほぼ全てナパタ期に年代づけられる（例外：メロエ期1基あり）。
- ② ナパタ期では上部構造のない墓は、ほぼ全て土坑墓である（例外：下部構造不明2基）。
- ③ ナパタ期では岩窟墓の場合、全て上部構造がある。
- ④ ベッド埋葬に関連するIII C や III D は、ナパタ期のみにみられる型式の墓である。
- ⑤ VIIIのDrop type は、ほぼ全てメロエ期に年代づけされる（例外：ナパタ期1基あり）
- ⑥ 子どもの墓として利用されるIXは、メロエ期の特徴的な型式の墓である。

また今回、上記の530基には含まれないIIという型式の墓があった。西墓地と同じ発掘報告書のシリーズ R.C.K. Vol. 1 は、クシュ王ピアンキと第25王朝の王たちの墓地クッル（El-Kurru）¹の報告書であるが、このIIという型式の墓がクッルで報告されている。土坑の長軸に沿って底が袋状に広がるこの型式の墓は、クシュ王たちに先行するとされる人物たちの墓として報告されている。古くはAグループ文化（A-group, 3800–2900 BCE）やCグループ文化（C-group, 2500–1500 BCE）の墓でみられるヌビアの伝統的な型式の墓であるが、ナパタ期の墓ではナイル川第4急湍の聖なる山ジェベル・バルカル（Jebel Barkal）からナイル川を挟んだ向かい側に位置するサナム（Sanam）という

遺跡くらいでしか確認されていないように思う。しかし、調べを進めたところ、どうやら西墓地のIIという型式の墓はクッルとは異なる型式の墓のようであり、おそらくメロエ期の終わり頃からポストメロエ期にメロエ地域を含む上ヌビアで見られる型式の墓と考えられる。

「年代不明」を3つの時期に振り分けたことから、前回示した西墓地の墓の分布図に表1の情報を追加し、それぞれの年代に属する墓の数と、全体に対する割合を示したもののが表2である。

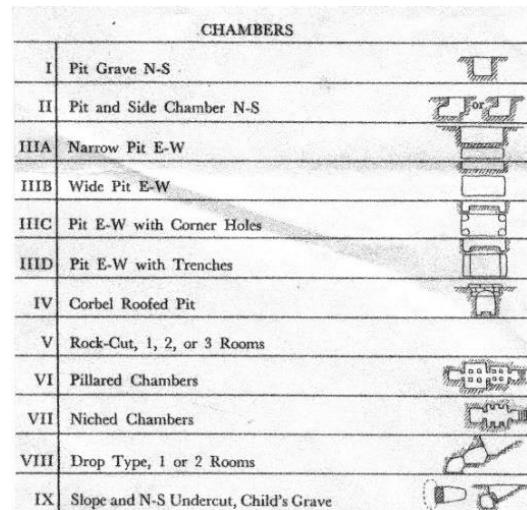


図2 埋葬室の型式一覧

(Dunham 1963 pp. 221)

地図色分け	墓の年代	墓の数	合計	割合
赤	ナパタ期：紀元前753–330年頃	329	408	49.8%
紫	（追加分）ナパタ期：紀元前753–330年頃	79		
黄緑	ナパタ期–メロエ期：紀元前6世紀前半–2世紀前半	10	15	1.8%
緑	（追加分）ナパタ期–メロエ期：紀元前6世紀前半–2世紀前半	5		
水色	メロエ期：紀元前3世紀中頃–紀元後3世紀末	191	397	48.4%
青	（追加分）メロエ期：紀元前3世紀中頃–紀元後3世紀末	206		
	総計	820		100%

3 表2 西墓地の墓（年代と数）

また図3はこれらの情報を基に、年代ごとに墓の分布状況が分かるよう地図上で示したものである。



図3 メロエ西墓地遺跡全体図 (Dunham 1963 を元に筆者が年代ごとに色分け)

2. 西墓地の墓の分布状況

前回、西墓地の遺跡の広がりと墓の年代、墓の型式について取り上げたが、年代不明の290基を3つの時期に振り分けたことから、改めてそれらについて確認をしたいと思う。

表2を確認すると、前回と比べて特にメロエ期の墓の数が倍増したことが分かる。その結果、遺跡全体に占める割合もナパタ期とメロエ期はほぼ同じになった。西墓地はナパタ期の初めからメロエ期の終わりまで約1千年間継続的に利用された墓地と考えられている。ナパタ期がおよそ400年で408基、ナパタ期からメロエ期の移行の時期が15基、メロエ期がおよそ600年で397基、と考えると、全体で820基と大規模な墓地のように感じていたが、意外と墓の数が少ないように思われる。ただし、西墓地と同じ頃に造営が始まった南墓地は、ナパタ期に属する墓が206基となっていることから、西墓地のほうが同じ期間で倍近く墓が築かれたことになる。

西墓地に関しては、子どものものと考えられる墓が非常に多く見つかっており、遺跡全体の約25%に当たる210基が子どもの墓である²。南墓地では墓地全体で子どもの墓が1基(ナパタ期のもの)しか確認できないことからも、西墓地の多さは際立っており、この墓

地の特徴ともいえる。この子どもの墓については、後ほど取り上げる。

西墓地の墓の広がりについて図3で確認すると、前回示したように南東から北西にかけて墓群が広がり、西側にはナバタ期の土坑墓を中心とした墓群、その東隣にはナバタ期と移行期（ナバタ期からメロエ期）のマスタバやピラミッドなど上部構造を持つ大型の墓、その北側にはメロエ期のマスタバ、中央には上部構造を持たないメロエ期の岩窟墓群、そして東側にはメロエ期のピラミッドなど上部構造を持つ大型の墓と上部構造を持たない岩窟墓が密集している、といった分布状況である。

東側のメロエ期の墓群の中にナバタ期や移行期の墓が僅かにみられ、何かの間違いのように思えるが、墓の型式から考えると、そのような年代が与えられるのが妥当といえる。後の時代の人物が、親族とは関係のない先人に憧れて近くに墓を建造することもあるようだが、年代ごとの墓群に当てはまらない例は僅かであり、概ね、西側はナバタ期の墓、東側はメロエ期の墓となっており、西側から東側へと墓の造営が行われたといえるだろう。

3. 墓の型式

表3は西墓地の820基の墓の型式を年代ごとにまとめたものである。表1と基本的な構成は変わっていないが、メロエ期の上部構造に「円形墳丘墓」が1つ追加されている。

墓の年代		合計	上部構造なし	上部構造あり	ナバタ期: 紀元前753-330年頃						ナバタ期-メロエ期: 紀元前6世紀前半-2世紀前半						メロエ期: 紀元前3世紀中頃-紀元後3世紀末							
上部構造					計	上部構造なし	マスタバ	ピラミッド	マスタバ	ピラミッド	痕跡あり	計	上部構造なし	マスタバ	ピラミッド	マスタバ	ピラミッド	上部構造なし	マスタバ	ピラミッド	マスタバ	ピラミッド	円形墳丘墓?	痕跡あり
土坑墓	下部構造																							
	I Pit grave	4	4	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	3	0	0	0	0	0
	II Pit and side chamber	3	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	3	0	0	0	0	0
	III A Narrow pit	225	217	8	224	216	3	0	4	1	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	0
	III B Wide pit	42	41	1	42	41	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	III C 矩形の土坑+四隅に穴	63	62	1	63	62	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	III D 矩形の土坑+両側トレンチ	7	6	1	7	6	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	イレギュラーな土坑墓	52	49	3	49	46	1	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	3	3	0	0	0	0	0
	小計	396	382	14	386	372	5	0	5	4	0	0	0	0	0	0	0	10	10	0	0	0	0	0
岩窟墓	V Rock cut	122	54	68	16	0	4	3	1	8	12	4	4	1	0	3	94	50	12	14	9	0	9	
	VI Pillared chamber	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0
	VII Niched chamber	11	2	9	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	10	2	1	4	3	0	0	0
	VIII Drop type	167	113	54	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	166	113	3	5	31	1	13	
	IX Slope and N-S undercut, Child's grave	90	90	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	90	90	0	0	0	0	0	0
	小計	391	259	132	17	0	4	3	1	9	13	4	5	1	0	3	361	255	16	23	44	1	22	
	下部構造不明	33	22	11	5	3	1	0	0	1	2	1	0	0	0	1	26	18	0	1	5	0	2	
	総計	820	663	157	408	375	10	3	6	14	15	5	5	1	0	4	397	283	16	24	49	1	24	

表3 西墓地の3つの時期の墓の型式（詳細）

すでに表1で触れた情報と重なる部分があるが、西墓地の墓の型式について、この表から分かる主なことを以下にまとめた。

- ① 西墓地では上部構造を持たない墓が圧倒的に多く、その割合は8割（663基；80.9%）。
- ② メロエ期でも上部構造を持たない墓が7割（283基；71.3%）ある。
- ③ 上部構造を持たない墓の下部構造は、土坑墓が382基（57.6%）、岩窟墓が259基（39.1%）。
- ④ 土坑墓と岩窟墓の数は同程度だが、土坑墓はナパタ期（386基；97.5%）、岩窟墓はメロエ期（361基；92.3%）がそれぞれ9割を占めている。
- ⑤ ナパタ期では岩窟墓の場合、全て上部構造がある。
- ⑥ 下部構造の中で最も多い型式の墓は、土坑墓のⅢA（225基；全体の27.2%）、2番目は岩窟墓のⅧ（167基；全体の20.4%）、3番目は岩窟墓のV（122基；全体の14.9%）
- ⑦ 土坑墓は概ねナパタ期に年代づけられるが、ナパタ期以前から長期間使用される型式の墓IやⅢAなどはメロエ期でも僅かにみられる。
- ⑧ ナパタ期とメロエ期でみられる土坑墓のⅡの型式の墓は、同じ型式ではない。
- ⑨ ベッド埋葬に関連するⅢCやⅢDは、ナパタ期のみにみられる型式の墓である。
- ⑩ ⅧのDrop typeは、ほぼ全てメロエ期に年代づけられる（例外：ナパタ期1基あり）
- ⑪ 子どもの墓IXは、全てメロエ期に年代づけられる。
- ⑫ 上部構造の中で最も多い型式の墓は、ピラミッド（55基；35.0%）であるが、ナパタ期のピラミッド（6基）は1基を除き下部構造が土坑墓である。ピラミッドの主流は岩窟。
- ⑬ メロエ期でみられる円形墳丘墓は、Aグループ文化等の時期の墓とは異なる型式である。

ナパタ期に関しては岩窟墓が17基と土坑墓の数に比べると非常に少ないとから、ナパタ期では土坑墓が主流であったといえるだろう。また、ナパタ期からメロエ期への移行期には土坑墓がみられず、13基全てが岩窟墓となっている。しかし、メロエ期では上部構造のない土坑墓が10基みられるなど、非常に興味深い。ただし、メロエ期に属する397基のうちの10基（2.5%）と割合としては非常に少ないため、ナパタ期からメロエ期にかけて、土坑墓から岩窟墓に変わって行く、という流れは揺るがないと思われる。これらのこととはメロエ期までにいえることだが、ポストメロエ期には土坑墓のⅡの型式の断面図に似た墓が上ヌビアで広く見られるなど、様々な変化があるようである。

3. 子どもの墓

西墓地では子どものものと考えられる墓が非常に多く見つかっている。ただし、多くの場合、遺体が確認できないため（遺体の痕跡を含めて3割ほどしか確認できない）、墓の大きさから、子どもの墓と推定されていることが多い。

830基の西墓地の墓のうち、約25%に当たる210基が子どもの墓とみられており、西墓地と同じ頃、墓の造成が始まったと考えられる南墓地では、ナパタ期に属する子どもの墓は1基しか確認されていない（南墓地の墓は216基）。このことからも西墓地の子どもの墓の多さは際立っており、西墓地の特徴の1つと言えるだろう。では西墓地の子どもの墓はどのような特徴がみられるのか、みていきたい。

表4は210基の子どもの墓を3つの時期に分け、時期ごとの墓の数と割合をまとめたものである。尚、子どもの墓は8割にあたる169基が「年代不明」であった。この原稿のために「年代不明」を3つの時期に振り分けたことで、分析可能となったことを記しておく。

地図色分け (子どもの墓)	墓の年代	各時期の墓における子ども墓の数と割合			子どもの墓での 割合
赤	ナパタ期： 紀元前753-330年頃	408	子どもの墓 90	時期ごとの割合 22.1%	42.9%
△	ナパタ期-メロエ期： 紀元前6世紀前半-2世紀前半	15	子どもの墓 0	時期ごとの割合 0%	0%
青	メロエ期： 紀元前3世紀中頃-紀元後3世紀末	397	子どもの墓 120	時期ごとの割合 30.2%	57.1%
△	総計	820	子どもの墓 210	全体での割合 25.6%	100%

表4 西墓地の子どもの墓（年代ごと）

210基の年代を確認すると、ナパタ期に属する墓が90基、メロエ期に属する墓が120基となっている。メロエ期の墓のほうが30基ほど多いが、ナパタ期が約400年、メロエ期が約600年継続していたことを考えると、それほど差ではなく、またそれぞれの墓の数も多すぎるようには思えない。西墓地での子どもの墓の割合は、ナパタ期で22.1%、メロエ期で30.2%となっており、西墓地全体の2割から3割ほどが子どもの墓となっている。

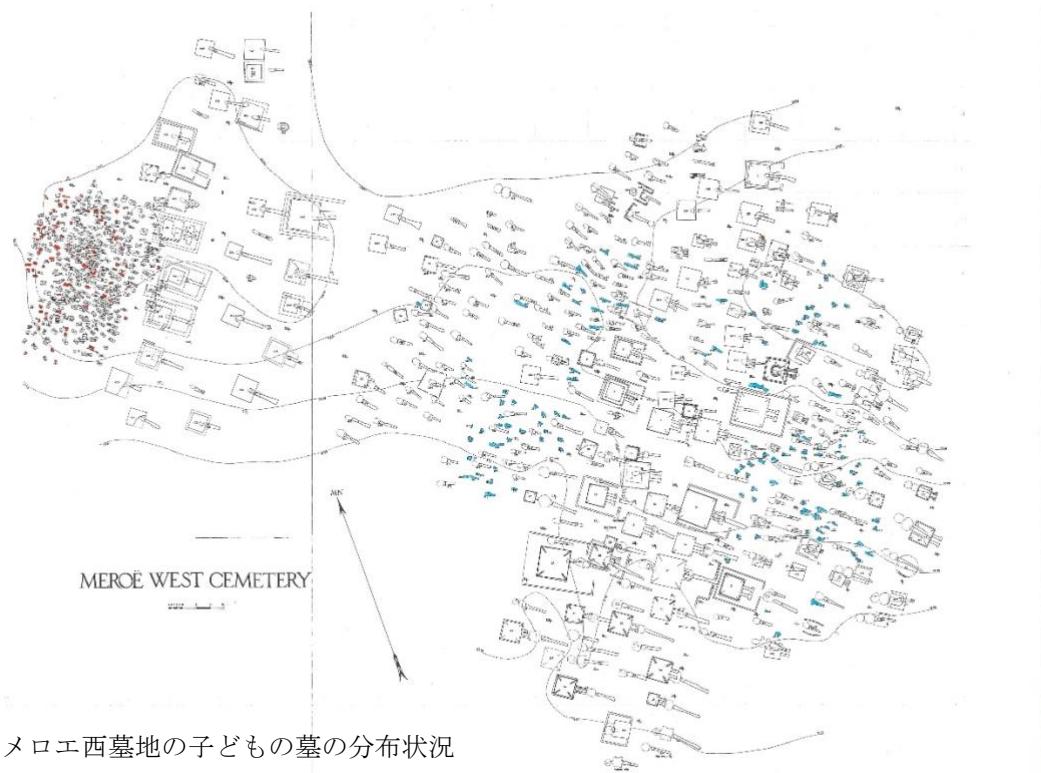


図4 メロエ西墓地の子どもの墓の分布状況

(Dunham 1963 を元に筆者が年代ごとに色分け)

また、図4は、子どもの墓を時期ごとに色分けし、西墓地内での墓の分布状況を示したものである。西墓地の墓は、西側にナパタ期の墓が造営され、東側にメロエ期の墓が造営されるといった分布状況が見られるが（図3参照）、図4の子どもの墓の分布状況を確認すると、色分けが少々分かりにくいか、いくつかのかたまりを形成しているよう見える。ただし、子どもの墓だけが集まった特定の場所がある、というより、家族の墓の近くに子どもの墓がある、ということなのではないかと思われる。子どもの墓の周辺の墓を詳細に調べれば、もう少し情報を得ることができるかもしれないが、今後の課題としたい。

表5は西墓地の210基の子どもの墓の型式をまとめたものである。上部構造については、その痕跡が確認できるものが3基のみとなっており、上部構造を持たない墓がほとんどである。また、下部構造については、土坑墓が94基、岩窟墓が102基、破壊などで下部構造が分からぬものが14基となっている。

子どもの墓で最も多い型式は、メロエ期の子どもの墓として挙げられる岩窟墓のIXであり、88基（41.9%）となっている。また土坑墓のIII A（32基；15.2%）やIII B（26基；12.4%）といった西墓地全体で多くみられる墓も、子どもの墓として利用されている。

概ね土坑墓はナパタ期、岩窟墓はメロエ期となっているが、例えば単純な土坑墓など長期間にわたって使われる型式の墓は、メロエ期の墓でもみることができる。

また、図2のところで扱ったが、IIという型式の墓のようにメロエ期の終わり頃からポストメロエ期にメロエ地域を含む上ヌビアで見られる型式の墓など、一部ではあるが、土坑墓が新しい時期でも使われるようになっていることは興味深い。

最後に1つだけ紹介したい遺物がある。図5はナパタ期の子どもの墓から出土したライオンの顔がついた「蠅のアミュレット」（護符）である。古代エジプトでは「蠅」は厄除けと守護の特質を持つと考えられており、古くから蠅の護符などが作られたと言われてい

墓の年代		ナパタ期： 紀元前753-330年頃			ナパタ期-メロエ期： 紀元前6世紀前半-2世紀前半			メロエ期： 紀元前3世紀中頃- 紀元後3世紀末		
		合計	上部構造なし	痕跡あり	計	上部構造なし	痕跡あり	計	上部構造なし	痕跡あり
土坑墓	上部構造									
	下部構造									
	I Pit grave	2	0	0	0	0	0	2	2	0
	II Pit and side chamber	2	0	0	0	0	0	2	2	0
	III A Narrow pit	32	32	32	0	0	0	0	0	0
	III B Wide pit	26	26	26	0	0	0	0	0	0
	III C 矩形の土坑+四隅に穴	6	6	6	0	0	0	0	0	0
岩窟墓	III D 矩形の土坑+両側トレンチ	1	1	1	0	0	0	0	0	0
	イレギュラーな土坑墓	25	24	24	0	0	0	1	1	0
	小計	94	89	89	0	0	0	5	5	0
	V Rock cut	8	0	0	0	0	0	8	6	2
	VI Pillared chamber	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	VII Niched chamber	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	VIII Drop type	6	0	0	0	0	0	6	5	1
	IX Slope and N-S undercut, Child's grave	88	0	0	0	0	0	88	88	0
	小計	102	0	0	0	0	0	102	99	3
	下部構造不明	14	1	1	0	0	0	13	13	0
	総計	210	90	90	0	0	0	120	117	3

表5 子どもの墓の型式（詳細）

る³。エジプトの新王国時代 (New Kingdom, 1550–1069 BCE) には「蠅」の図像が軍隊の勲章として採用されたとされ、同じような「蠅」をモチーフにしたメダルやペンダント、ネックレスなどがヌビアのケルマ期 (Kerma, 2500–1500 BCE) の戦士の墓から出土している。蠅はしつこく纏わりつくため、敵に対して勇猛果敢に立ち向かうタフな戦士にとって、蠅は好ましいイメージであったようである⁴。

図5の「蠅のアミュレット」は、エジプトのセクメト女神（雌ライオン）の顔がついたものとなっており、ケルマ期の戦士の墓から出土する「蠅」をモチーフにした副葬品とは全くイメージが異なり、非常に愛らしい遺物である。このようなライオンの顔がついた蠅のアミュレットは一般的ではなく、この西墓地の Beg, W603 と Beg, W678、Beg, W861 の子どもの墓からのみ出土している⁵。遺体の首元や胸の辺りで見つかっていることから、幼くして亡くなった子どもを悼む家族が魔除けのために置いたのではないかと思われる。ファイアンス製で15個くらいが一度に出土しているものもあることから、おそらくネックレスなど身に着けるようになっていたのかもしれない。

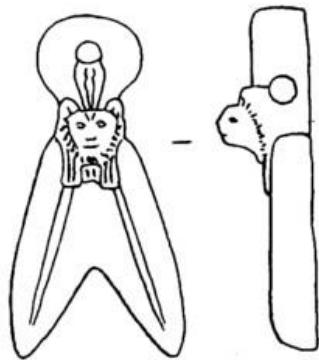


図5 セクメト女神の蠅アミュレット
メロエ西墓地 Beg, W861 より出土
(Dunham 1963, p. 12)

4.まとめ

前回、調べが間に合わず、西墓地を2回に分けて紹介することになった。しかし、墓の情報があまりにも膨大すぎてまとめ切れず、副葬品や埋葬遺体などには触れることができなかった。今回、1つだけライオンの顔のついたアミュレットを紹介したが、この遺物のように他ではあまりみかけることがないような副葬品が、特にクシュ王ピアンキの時期の墓で見つかっている。

西墓地は高官や王位に就かなかった王家の人々といったエリート層の墓地と考えられているが、同時期に造営が始まった南墓地の被葬者との関係はよく分かっていない。また、ナパタ期のクシュ王国の中心地はナイル川第4急湍の下流のナパタ地域であり、聖なる山ジェベル・バルカルの麓には神殿や王宮などが造られ、クシュ王たちはそこで統治を行っていた。クシュ王たちの2つの墓地クッルとヌリもナパタ地域にある。そのため、なぜナパタ地域から遠く離れたメロエの地にクシュ王家と関係する人々の墓が造営されることになったのか、多くの研究者が様々な仮説を唱えているが、メロエの発掘調査から100年以上経った今もはっきり分からぬ。クシュ王国は謎が多いが、非常に魅力溢れる遺跡や遺物が多くあるため、その魅力を伝えられるように調べを進めたいと思う。

参考文献

Dows Dunham, *EI-Kurru, (The Royal Cemeteries of Kush Vol. 1; Boston, Harvard University Press 1950)*.

- Dows Dunham, *The West and South Cemeteries at Meroë*, (The Royal Cemeteries of Kush Vol. 5; Boston, Museum of Fine Arts, 1963).
- Geoff Emberling & Bruce B. Williams (eds.), *The Oxford Handbook of Ancient Nubia*, Oxford University Press, New York, 2020.
- Marjorie M. Fisher (ed.), *Ancient Nubia: African Kingdom of the Nile*, The American University Press, Cairo, 2012.
- Angelika Lohwasser, *The Kushite Cemetery of Sanam: A Non-Royal Burial Ground of the Nubian Capital, c. 800–600BC*, (Golden House Publications, London, 2010).
- Yvonne J. Markowitz & Denise M. Doxey, *Jewels of Ancient Nubia*, (MFA Publications / Museum of Fine Arts, Boston, 2014).
- Mahmoud El-Tayeb, “Chapter 36: Post-Meroe in upper Nubia”, in Emberling & Williams (eds.), 2020, 731–757.
- Janice W. Yellin, “Chapter 29: The Royal and Elite Cemeteries at Meroe”, in Emberling & Williams (eds.), 2020, 563–588.
- イアン・ショー & ポール・ニコルソン, 『大英博物館古代エジプト百科事典』内田杉彦（訳）, 原書房, 1997年。

¹ 第25王朝のタハルカ (Taharqa) 王は、新たな王墓地ヌリ (Nuri) に自分の墓を築いたが、タハルカ王の次の王のタヌタマニ (Tanutamani) の墓はクッルに築かれた。タハルカ王が王墓地をクッルからヌリに変えた理由については、諸説あるがはつきりしない。

² 西墓地の子どもの墓については、遺体（痕跡含む）が確認できる墓は69基しかない。多くの場合、遺体や副葬品などが多く、墓の大きさから子どもの墓と推定されている。

³ 「ハエ」の項目, 大英博物館古代エジプト百科事典, 原書房, 1997, p. 409

⁴ Markowitz & Doxey 2014, pp. 99–101

⁵ 西墓地の発掘報告書には、同じようなアミュレットがカワ (Kawa) という遺跡の王宮の報告書に載っているようだとの記載があった (Dunham 1963, p. 12)。